

11	海部	蟹江町立須西小学校	フジエダ カホ 名前 藤枝 香帆
分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学その他）

研究題目

自分の考えをもち、ともに学び合う児童の育成
—読む力を高めるための活動を通して—

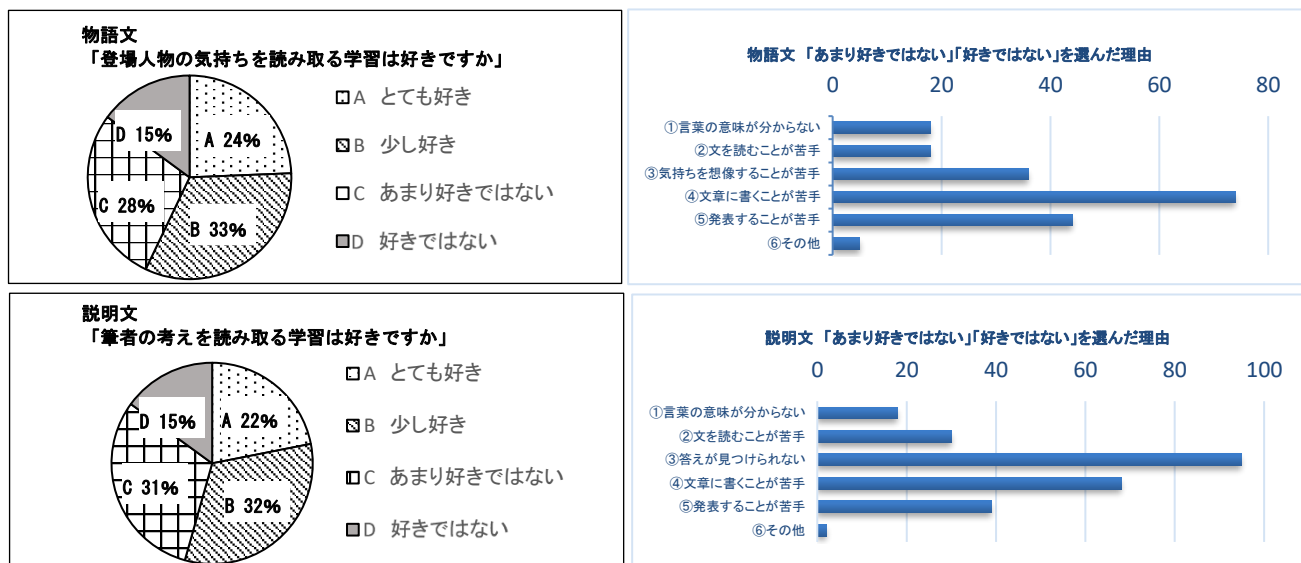
研究要項

1 はじめに

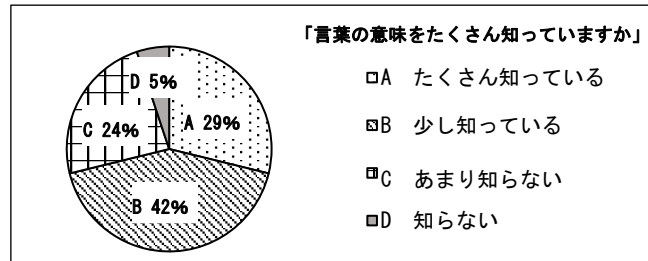
本校は、国語科での研究を始めて2年目となる。国語科の研究を始めるにあたり、昨年度の4月当初に行ったアンケートの結果から、児童が読み取りの学習に対して苦手意識をもっていることが分かった。そこで1年目の昨年度は、文章を正しく読み取ることを目指した「授業づくりの工夫」を柱として研究を行った。その成果として、読み取りの学習に対して、苦手意識をもつ児童が少し減った。しかし、授業を行っていく中で、文章中に出てきた言葉を違う言葉で言い換えたり、登場人物の気持ちをさまざまな言葉で表したりすることが難しく、児童があまり言葉を知らないということが分かった。このことにより、言葉の意味が分からないから文章を正しく読み取ったり、さまざまな言葉を用いて書き表したりすることができないのではないかと考えた。

そこで、児童の実態を把握するために、2年生から6年生の児童を対象に、国語科の学習に関するアンケート調査を行った【資料1】。物語文で、「登場人物の気持ちを読み取る学習は好きか」という質問に対して、「あまり好きではない」「好きではない」と答えた児童は43%と、約半数という結果となった。説明文で、「筆者の考えを読み取る学習は好きか」という質問においては、「あまり好きではない」「好きではない」と答えた児童は46%と、説明文においても約半数となり、依然として苦手意識が残っていることが分かった。どちらの質問に対しても「あまり好きではない」「好きではない」を選んだ理由を問うと、物語文では「文章に書くことが苦手」という理由が最も多かった。説明文では「答えが見つけれない」という理由に続けて2番目に「文章に書くことが苦手」が多い理由となった。また、「言葉の意味をたくさん知っているか」という質問に対しては、「たくさん知っている」「少し知っている」と答えた児童が、71%と半数を大きく超えた【資料2】。この結果から、答えが見つけれず、文章を書くことが苦手だと感じていても、言葉の意味を知っていると思っている児童が多いことが分かる。しかし、児童の意識と学習の実態には大きなギャップがあり、教師は、授業のさまざまな場面で、児童の語彙の少なさを感じることも多くある。このことから、児童自身が学習の実態を正確に把握し、語彙力を向上させた上で読み取りの力や書く力を高めることが必要であると考えた。

そこで、研究2年目となる本年度は、読む力を高めるために、児童の語彙力の向上を目指した取組を実践したい。言葉をより多く習得させ、学習した言葉を活用する力を身に付けさせていくための「語彙力のトレーニング」を柱として実践を進めていく。そして、授業で他者と考えを共有することを通して、多くの語彙や表現に慣れ親しませることを意識していきたい。



【資料1】 アンケート調査の結果（物語文・説明文）



【資料 2】アンケート調査の結果「言葉の意味をたくさん知っているか」

2 研究のねらい

(1) 目指す児童像

- ・ 語彙を増やすことで、文章に書かれた言葉の意味を理解し、正確に内容を読み取ることができる児童
- ・ 自分の考えを広げたり深めたりすることができる児童

(2) 研究の仮説

【仮説 1】

たくさんの言葉にふれる場面を設定し、その言葉の意味を理解して活用する力をつけることで、文章の内容を正確に読み取ることができるようになるだろう。

【仮説 2】

話し合い活動を通して「自分の読み」と「友達の読み」を比べることで、他者の視点からの気づきが生まれ、自分の考えをさらに深めることができるだろう。

3 研究の対象

全学年（350 名） ※アンケート 2～6 年 278 名（支援学級児童除く）

4 研究の方法

(1) 【仮説 1】に対する手だて

- ① 朝の時間に国語タイムを設け、語彙力の向上につながるトレーニングを行わせる。
- ② 文章の中で出合った言葉や表現について、意味や使い方を確認させるために、教科書巻末の「言葉の宝箱」を活用させる。
- ③ 物語文において、物語の背景や登場人物の心情が分かる表現に着目させ、色を分けて線を引かせることで気持ちの変化を可視化させる。
- ④ 説明文において、筆者の意図を読み取らせるために、「繰り返し使われている言葉」、「対比表現」、「接続語」、「言い換え表現」に着目させる。

(2) 【仮説 2】に対する手だて

- ① 話し合いの型を提示し、自分の考えを発表しやすくさせる。
- ② 児童に「自分の読み」を発表させ、「友達の読み」との共通点や相違点に気付かせる。また、話し合い活動の中で、質問や付け足し意見、反対意見を出させ、学級全体で読み取りを深めさせる。
- ③ 授業で印象に残ったことや、「友達の読み」を知って「自分の読み」が変わったことを表現させる。

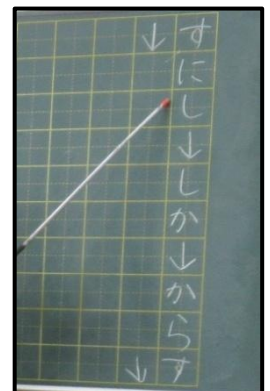
5 全学年の実践

(1) 国語タイムの実践 ～全学年の取組を通して～

本年度は、2 週間に 1 回、朝の時間に、語彙力の向上を目的としたトレーニングのための「国語タイム」（15 分間）を設けた。文章を読み取る力をつけるため、それぞれの学年に合ったトレーニングを行うようにした。また、1 人 1 冊ずつ「国語ファイル」を用意し、国語タイムで使用したプリントなどをまとめることで、それまでに身に付けた語彙を振り返られるようにした。

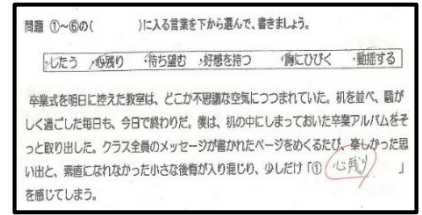
1 年生 しりとりや言葉遊びを通して、楽しみながら多くの言葉にふれさせた【資料 3】。

2 年生 短文が書かれた問題を選び、読み取りの問いに答える活動を行った。



【資料 3】1 年生の実践

- 3年生** タブレット端末を使って、気持ちを表す言葉を選ぶ活動をした。タブレット端末を使うことで、児童の結果を集計し、個人や学級の結果が後からでも分かるようにした。
- 4年生** それぞれの行動からどのような気持ちが読み取れるのかを考えるトレーニングを行った。
- 5年生** タブレット端末を用いて、「言葉の宝箱」に書かれている言葉の意味調べを行い、意味をプリントに記入した。
- 6年生** AIを使って「言葉の宝箱」の中にある言葉を用いた文章を作り、()に当てはまる言葉を選択肢から選び答えた【資料4】。



【資料4】6年生の実践（一部抜粋）

(2) 2年生 説明文「たんぽぽのちえ」～接続語について考える学習を通して～

① 授業実践について

第10段落では、「このように」という接続語に着目し、どのような言葉かを考えさせる授業を展開した。

初めに、児童にとって分かりやすいように、「席に着く。筆箱を出す。教科書を出す。このように、授業の準備をする」といった学校生活での行動について、「このように」という言葉を使った例文を提示した。一文ずつ示していき、「このように」の後に続く文を児童に予想させると、学級の大半から「授業の準備をする」という答えがすぐに返ってきた。なぜそう考えたのか問うと、曖昧な答えが返ってきたことから、児童が「このように」という言葉の役割を、大まかにしか理解していないことが分かった。

次に、「このように」という言葉の意味を考えてワークシートに記入させ、ペアでお互いの考えを共有する活動を行った。考えを伝え終えたら、友達の考えもワークシートに記入させた。伝え合いが終わった後、自分の考えと友達の考えのどちらが納得できる意見なのかを考えさせ、よいと思う方に印を付けさせた。

学級全体での意見交流では、「行動を説明する言葉」という考えに焦点を当て授業を展開した。「行動を説明する言葉」の意味を問うと、「例文にあった3つの行動は、「このように」の後の1つの文で説明されているから」という意見が挙がった。つまり、「このように」という言葉は、これまでの内容をまとめたり、言い換えたりすることができる言葉であることを押さえた。また、多くの内容を一つにまとめる言葉である「このように」という言葉を、挿絵を使って視覚的に捉えさせた【資料5】。最後に、「このように」という接続語を使って表現する活動を行った。



【資料5】
挿絵による視覚化

② 【仮説1】に対する手だてについて

児童にとって抽象的な接続語の意味を、これまでの学校生活と言語経験を結び付けて捉えさせる場面を設定した。一文ずつ提示し「このように」の先を予想させることで、児童が経験的にもっている言葉の役割に関する曖昧な認識を刺激した。これにより、児童が言葉を正しく理解し、活用する足がかりとすることができた。

また、児童から出た言葉を用いて「具体（三つの行動）」から「抽象（一つのまとめ）」へのジャンプを意識化させることで、言葉の意味を正しく理解させた。さらに、文字による情報だけでなく挿絵による視覚化を併用することで、語彙の定着を図り、文章を正確に読み解くための「活用できる知識」へと高めることができた。

③ 【仮説2】に対する手だてについて

「このように」という言葉の意味について個人思考を行った後、ペアによる交流の時間を設けた。その際、友達の考えを自分のワークシートに書き留めることとした。この活動は、自分一人では気付けなかった言葉の捉え方やニュアンスにふれ、自分の読みと友達の読みを客観的に比較するきっかけとなったと考える。また、ペア活動後、約4割の児童が友達の意見に納得して印を付けたことから、児童が自分の意見に固執せず、他者の視点を取り入れながら「自分の読み」を「より納得度の高い読み」へと深化させたことを示している。さらに、残りの6割の児童においても、他者の意見と比較・検討した上で「やはり自分の考えが正しい」ということを再確認でき、結果として学級全体の思考を

深められた。

(3) 3年生 物語文「まいごのかぎ」～登場人物の様子を表す言葉から気持ちを読み取る学習を通して～

① 授業実践について

本単元の学習に入る前に、言葉の意味調べを行わせた。そして、人物の様子や気持ちを表す言葉をまとめた学習プリントと、意味調べをした学習プリントを1冊にまとめた「言葉の宝箱」を作成した。言葉一つ一つの意味から主人公の気持ちを考えさせるために、単元の初めに通読はせず、毎時間の授業で該当箇所の本文を初読させた。児童には、主人公の様子や言動を表す言葉を見つけさせ、そこから分かる気持ちやその気持ちになっている理由を考えさせた。また、タブレット画面上で「気持ちメータ」を用いた。「気持ちメータ」とは、ハートの中の赤色と青色の割合で、主人公の気持ちを可視化するものである。抽出したそれぞれの言葉についての主人公の気持ちを、毎時間の最後に「気持ちメータ」で表現させ、提出させた。本単元では、言葉やその意味に着目させるために、「言葉の宝箱」を適宜確認することを意識させた【資料6】。単なる想像ではなく、本文に書かれている言葉から主人公の気持ちを捉え、その気持ちになった理由を、根拠をもって読み取れるようになることを目指した。

本時では、「まいごのかぎ」の第5場面を3つに分け、そのうちの最初の部分の授業を行い、主人公である「りいこ」の気持ちを考えることを目標とした。まず、りいこの気持ちが分かる様子や言動に線を引かせた。ポジティブな気持ちには赤、ネガティブな気持ちには青で線を引かせることで、心情の上下を視覚的に把握できるようにした。児童が線を引いた言葉から、特にりいこの気持ちや迷いが表れている4つの言葉を抽出し、これらの言葉について気持ちを考えていくことを伝えた。次に、それぞれの言葉におけるりいこの気持ちやその理由を学習プリントに書かせた。その際には、「言葉の宝箱」や、これまでの本文を参考に書くように伝えた。「ほっとしたような、がっかりしたような」という言葉からは、「何も起こらなくて安心したけれど、期待していたからがっかりした」と、本文や前時までの場面を基にりいこの気持ちを考えることができた児童もいた【資料7】。書き終わり次第、学習プリントの写真を撮って学習支援ソフトを使って提出させ、他の児童が提出した学習プリントを共有画面で閲覧させた。互いの学習プリントを読んだ後、疑問やよいと思ったことを伝え合う時間を取り、全体で確認した【資料8】。最後に、それぞれの言葉におけるりいこの気持ちを「気持ちメータ」で表現させ、学習支援ソフトで提出させた。そして、りいこの気持ちの変化を全体で共有した。

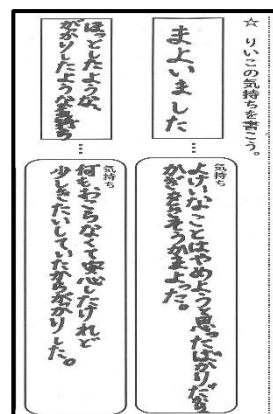
児童からは、「言葉の宝箱」を参考にしたり、りいこの気持ちやその理由を前時までの内容から考えたりする様子が見られ、本文や言葉に着目することができたと言える。一方で、児童が一人で考える時間は確保できたが、全体で共有する時間は十分にとることができなかった。りいこの気持ちや迷いをより深めるまでに至らなかったため、時間を確保するための授業構成を工夫する必要がある。

② 【仮説1】に対する手だてについて

単元を通して言葉に着目させ、調べたものや知った言葉をいつでも見られるように「言葉の宝箱」としてまとめた。また、使った言葉には印を付けていくこととした。さまざまな場面で、「この言葉はどういう意味か」と声をかけることで、「言葉の宝箱」を使ってすぐに確認する児童が増えていった。「言葉の宝箱」として1冊にまとめたことで、児童がいつでも確認できるようになり、言葉の意味をすぐに調べることができるようになったと考える。以前は、言葉の言い換えをすることが難しかったが、少しずつ別の表現をするための語彙が増えてきた。また、その後の授業においても、児童自身の言葉に対する意識も変化してきた。一方、意味調べをすることで言葉の意味を確認することは



【資料6】言葉の宝箱を参考にする様子



【資料7】学習プリント



【資料8】伝え合う様子

きるものの、その解説の中にも分からない言葉が含まれており、単に書き写すだけになってしまう児童もいた。また、自分が使った言葉に印を付ける活動は、主体的に取り組む児童とそうでない児童に分かれてしまった。今後は、それぞれの言葉をどのように活用していくのか、どのような場面で使うのかを理解させる必要がある。また、学んだ言葉を実際に使わせる場面を多く設定することで、より語彙の定着を図ることができると思う。

③ 【仮説2】に対する手だてについて

本単元では、各自が書いた学習プリントの写真を撮って、学習支援ソフトを使って提出させ、友達の考えを知ったり質問したりさせる活動を取り入れてきた。児童は、多くの友達の考えを知り、よいと思った考えを赤鉛筆で書き写すなど、自分とは異なる考えや視点にもふれることができた。一方、さまざまな考えを知った上で、自分の考えを深めるための時間や活動が足りず、他者の考えを知るのみにとどまってしまった。また本時では、言葉を見つける活動の後の読み取りと全体共有に多くの時間を費やし、対話を通して考えを深めるための時間が不足してしまった。今後は主人公の気持ちを考え、学級で深め合うことに重きを置いた授業を構成することで、話し合いから自分の考えをさらに深めることができると思う。確固たる自分の考えをもたせた上で、話し合いに時間をかけた授業構成を考えていく必要がある。

(4) 5年生 物語文「銀色の裏地」～主人公の心情の変化から題名の意味を考える学習を通して～

① 授業実践について

第5場面の本時の導入では、前時で捉えた主人公「理緒」の「不満（青線）」を振り返ることで、「心情の変化」を際立たせる土台を作った。

まず、児童は一人読みを通して理緒の明るくなった気持ち（赤線）を探し、前時の青線と比較することで、明確な心の変化を実感した。さらに、その変化の契機となった友達「高橋さん」の言葉に着目させ、各自が叙述を基に理緒の具体的な心情を考え、タブレット端末のシートに入力していった【資料9】。

次に、「銀色の裏地」の意味について、児童一人一人が自分の言葉を使って考え、グループでの対話へとつなげた。交流の際には「相手を見て聴く」「自分の考えと同じ部分を探す」「意見を組み合わせてもよい」という具体的な手だてを講じた。これにより、互いのタブレット端末の画面を見合いながら、生き生きと意見を交わす姿が見られた【資料10】。

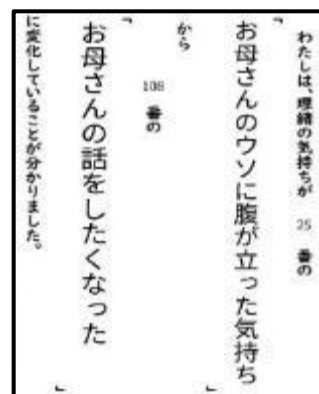
全体発表の場では、児童から「辛いことがあっても、よいことは必ずある」「嫌なことがあっても、幸せなことは絶対ある」といった深い読み取りが次々と発表された。よくないことの後にはよいことがあるという本質を学級全体で共有したことで、題名の意味への理解が一気に深まった。最後に、前向きになった理緒の今後を想像させると、「新しい友達とたくさん思い出を作ると思う」といった記述が見られ、児童が理緒の変容を自分のことのように捉え、物語を主体的に読み取った姿を確認することができた。

② 【仮説1】に対する手だてについて

物語に出てくるつまずきそうな言葉について、事前に調べ学習を行わせたことで、児童は言葉の意味を理解した状態で本文に向き合うことができた。そのため、初読の段階でつまずくことなく、気持ちや様子を表す言葉に自分の力で線を引くことができた。一方で今回の調べ学習は、あくまで本文中に出てくる言葉を対象としており、児童自身が理緒の気持ちを表現するために必要な「気持ちを表す言葉」を扱っていなかった。そのため、児童自身の言葉で気持ちを言語化しようとした際、「不満」「嫌だ」といった限定的な言葉に留まってしまったという課題が見られた。今後は、本文中の言葉だけでなく、気持ちを表す言葉についても事前に調べさせ、言葉のレパトリーを広げておく必要がある。

③ 【仮説2】に対する手だてについて

タブレット端末を活用したことは、話し合い活動において「自分の読み」と「友達の読み」を比較する上で有効に機能したと考える。学習支援ツールに各自の考えを入力し、グループの意見としてまとめて提出させたことで、自分の意見と他者の意見をモニター上で同時に比較・確認させることができた。口頭でのやり取りでは聞き逃してしまう可能性のある友達の考えも、視覚的に比較・確認しやすい環境になったと言える。また、



【資料9】児童が入力したシート



【資料10】グループでの交流

国語科の学習を苦手とする児童においても、グループの中で意見を共有し、まとめる過程に参加させたことで、自分だけでは思いつかなかった読み取りに気付くことができた。これは、他者の視点にふれることで、自分の考えを深めることができ、効果的であったと言える。しかし、一部のグループでは、複数の意見を比較したり話し合ったりすることができなかった。特定の児童の意見のみが採用され、そのままグループの意見として提出される場面が見られた。これは、グループ内での発言力や自信の差により、他の児童の考えが十分に共有されないまま話し合いが進んでしまったことが原因と考えられる。タブレット端末で意見を可視化しても、それを比較し、話し合いをする過程そのものが機能しなければ、他者の視点からの気付きは生まれにくい。今後は、意見をまとめる際に「なぜその考えに至ったのか」を全員で確認し、一人の意見に偏らないための話し合いの進め方そのものを見直していく必要がある。

6 研究の成果

(1) 【仮説１】の取組について

- ① 「国語タイム」では、トレーニングの内容を各学年で話し合い、発達段階に合わせた活動を実施してきた。15分間という短い時間であること、問題量も多くないことから、児童の負担も少なく、さまざまな言葉やその意味、使い方を実践的に学ばせるよい機会となった。
- ② 「言葉の宝箱」を積極的に活用した取組によって、「言葉の宝箱」を参考にしながら授業に取り組む様子が多く見られた。また、自発的に言葉の意味を調べる様子から、言葉の意味を知ろうとする児童の意識の変化も見られた。
- ③ 言葉の意味を理解することは、物語文を読み取る上で効果があったと考える。本文中の気持ちを表す言葉を根拠として、登場人物の気持ちや人柄を読み取ろうとする力が身に付いた。
- ④ 昨年度に続き、「繰り返し使われている表現」、「対比表現」、「接続語」、「言い換え表現」に着目させることで、読み取るための大事なポイントを自分で見つける力が少しずつ身に付いてきた。また、接続語の意味やその使い方を学ぶことで、違う文章でも活用しようとする姿が見られた。

(2) 【仮説２】の取組について

- ②③ 「友達の読み」を知る時間を取り、「自分の読み」と比べさせたことで、児童は共通点や違いに気付き、赤で追記したり、よさや疑問を直接伝え合ったりした。その際に、タブレット端末を使用したことは、短い時間で多くの児童の考えを知ることができるという点で有効であった。たくさんの考えの中から納得したものや共感したものを選ぶことで、自分の読みをさらに深めることができた。

7 研究の課題

(1) 【仮説１】の取組について

- ① 「国語タイム」は、まだ試行錯誤の段階で、1学期では実施の回数が少なかった。機会を増やし、成果や課題を継続的に検討していくことが必要である。
- ② 意味調べを行わせたことで、多くの言葉を知ることができた児童もいるが、学力によっては書き写すだけになってしまう児童もいた。意味調べの方法について再度考える必要がある。意味を調べてもその使い方が分からないという状況をなくすために、その言葉の例文や使い方も合わせて学ぶことを意識させていきたい。また、「言葉の宝箱」の活用の仕方が、学年によって異なっていたため、学校で統一し、学年が上がっても引き続き使える形にすることが大切だと考える。
- ③④ 物語文、説明文のどちらにおいても、言葉や文に着目することはできたが、その分読み取りに多くの時間を費やすことになった。授業時間を確保するために、大事な場面・段落を精選して読み取りをさせる必要がある。

(2) 【仮説２】の取組について

- ① 本年度は、語彙力の向上に重きを置いたことにより、話し合い活動まで力を注ぐことができなかった。来年度に向けて、「話し合いの型」についても、検討していく必要がある。
- ②③ 「自分の読み」と「友達の読み」を比べさせようとしても、児童一人一人の読み取りが十分にできていないと、話し合いに進むことができないということが分かった。ペアやグループ、学級全体で話し合い、深めさせるためには、読み取りの時間と話し合いの時間を分けて行う必要もあると考える。